

品陀和氣命と神

——〈仲哀天皇〉の克服——

松 本 弘 毅

はじめに

古事記は天皇の地上統治の由来と正当性を説いた書である。そのうちの中巻は、初代神武天皇が倭に都を定めて、以降祭祀体制の完成（崇神・垂仁記）と東西全土の統治（景行・成務記）が成ったことを述べる。それを受けて仲哀記では新羅征討の成功を記し、中巻全体で天皇の統治領域たる天下が成立したという歴史展開を示している^①。

ただし仲哀天皇自身は、天照大神たちの神託を信じなかったため神罰により崩御してしまう。神々は、次代天皇として息長帯日売命（神功皇后）の腹の中にいた品陀和氣命（後の応神天皇）を指名した。仲哀天皇の崩御の様子からは天照大神の神意は絶対であることがうかがえるため、品陀和氣命の即位は確実な保証を受けているといえる^②。

仲哀記後半の説話については、太子の死（謀略としてのだが）と復活、国覚ぎ・御食（氣比大神の説話）、酒楽の歌と続くことから、

「即位大嘗の儀礼の表象」と見る向きもある^③。しかし多くの他の天皇にはないのに、品陀和氣命は新天皇として即位するに至る描写をなぜ必要とするのだろうか。研究史でも種々論じられてきたように、仲哀記後半の説話群の関係性を見て取るのは容易ではない。本論では、品陀和氣命にとつての固有な理由があり、今見るような仲哀記の説話群となっていることを述べていきたい。

仲哀記・神功紀の説話の概観

改めて仲哀記後半の構成を確認する。新羅征討を終えた後の説話、香坂王・忍熊王の反乱説話、そして氣比大神の説話、最後に酒宴の説話がこれに当たる。簡単にまとめると、まず香坂王・忍熊王の反乱説話は、誕生したばかりの品陀和氣命と息長帯日売命に對して、御子の異母兄弟に当たる二皇子が戦をしかけてくる説話で、乱の鎮圧を通して品陀和氣命の即位が確立されたことを説いている。氣比大神の説話は、その乱の後に禊をするために北陸各地をめぐるに際し、角鹿で氣比大神と名前を替える交渉が

あつたことを伝える。倭に皇子が帰還すると、母の息長帯日売命が歓迎したという内容が最後の酒宴説話である。

日本書紀にも、これら二三説話と類似したものが載せられている。

撰政前紀 新羅征討・誉田天皇の誕生

元年二(三)月 麿坂王・忍熊王の反乱

二年十一月 仲哀埋葬

三年正月 誉田別皇子の立太子

五年三月 新羅の人質

十三年二月 角鹿の筥飯大神参拜・酒宴歌 (以下省略)

麿坂王・忍熊王の反乱は神功撰政元年二月から三月にかけて記されており、仲哀天皇の埋葬記事が二年十一月にある。また誉田別皇子の立太子は三年正月条に記され、飛んで十三年二月条に角鹿の筥飯大神を参拜した説話と酒宴説話が記されている。角鹿の地は大陸・朝鮮半島をめぐる要衝とも指摘され、角鹿の地の神を抑えることの意味は理解される。またホムダグワケは、「胎中天皇」⁽⁵⁾などともいわれるように、母の腹の中にいながらにして海外平定をなした天皇との認識もあつたようである。海外との関係が強いホムダグワケと筥飯大神との交渉を伝えるこの説話を記・紀が載録している意味は、一つにはここに求められよう。

また、古事記でも書紀でも、氣比大神(筥飯大神)の説話と酒宴説話は連続して記されている。書紀では十三年二月条にまとめて記されているが、その直前の記事は五年三月条であり、次は三十九年条まで記事がない。

この二つの説話の連続は、記・紀成立の当時に普通に考えられ

ていたことなのであろう。従つて、それ自体に積極的な意図を見出すことは難しい。ただし氣比大神の説話とそれに連続する酒宴説話を、古事記が新羅から倭への帰還途中に配置しているのには意図があると考ええる。以下、まず氣比大神の説話から見えていき

氣比大神の説話

故、建内宿禰命、率^二其太子、為^レ将^レ禊而、経^二歴淡海及若狭国^一之時、於^二高志前之角鹿^一、造^二飯宮^一而坐。爾、坐^二其地伊奢沙和氣大神之命、見^レ於^二夜夢^一云、以^二吾名^一欲^レ易^二御子之御名^一。爾、言禱白之、恐、随^二命易奉^一。亦其神詔、明日之日、応^レ幸^二於^二浜^一。献^二易^一名之幣。故、其日幸^二行于^二浜之時^一、毀鼻入鹿魚、既依^二二浦^一。於是、御子令^レ白^二于^二神云^一、於^レ我給^二御食之魚^一。故、亦称^二其御名^一、号^二御食津大神^一。故、於^レ今謂^二氣比大神^一也。亦其入鹿魚之鼻血鼻。故、号^二其浦^一謂^二血浦^一、今謂^二都奴賀^一也。

不明瞭な点が多い説話だが、その最たるものとして注目されてきたのは、神と太子で名前をやり取りした結果である。傍線部の神の言葉をどのように解するかについて、諸注諸論の意見は一致していない。考えられる可能性としては以下の三つの説がある。

- ・太子の名を大神の名にかえる⁽⁷⁾
- ・大神の名を太子の名にかえる⁽⁸⁾
- ・両者が名を交換する⁽⁹⁾

構文からすれば、いずれも考え得る解である⁽¹⁰⁾。問題は古事記が

名の交換の結果を明示しないところにある。神の名は最初に「伊奢沙和氣大神」とされており、太子からの称賛を経て今は「氣比大神」ということが示されている。途中で付与された「御食津大神」との名は称号ともいふべきものであり、太子との名のやり取りの如何を確定できはしない。また太子の名は仲哀記の系譜部に、
帶中日子天皇、……又娶息長帶比売命。是太后生御子、品夜和氣命、次大鞆和氣命、亦名品陀和氣命（二柱）。

とあり、「大鞆和氣命、亦名品陀和氣命」の名が示されている。しかし実際のところ、後の説話部分では「御子」や「太子」と代名詞的に呼ばれ続けている。氣比大神の説話においても事情は同様で、名前に変化があつたのかは確認できない。

氣比大神の説話は日本書紀（神功皇后卷）にも見えるが、やはり問題が存する。

十三年春二月丁巳朔甲子、命武内宿禰、從太子令押角鹿筭飯大神。

ここでは太子が筭飯大神を参拝したこのみ書かれている。一方、応神天皇の巻を見ると異伝が記されている。

一云、初天皇為太子、行于越国、押祭角鹿筭飯大神。時大神与太子名相易。故号大神曰去来紗别神。太子名菅田別尊。然則可謂大神本名菅田別神、太子元名去来紗别尊。然無所見也、未詳。

（応神即位前紀分注）

応神天皇が太子であつた頃に筭飯大神を参拝して名前を交換し、大神は去来紗别神、太子は菅田別尊といったとある。これならやはり取りの結果は明瞭だが、書紀は続けて、「然則可謂大

神本名菅田別神、太子元名去来紗别尊。然無所見也、未詳」とも記している。日本書紀でも結局未詳として判断が保留されているのであり、記・紀の頃から大神と太子の交換結果は不明瞭であつた可能性がある。

名前の交換結果を示すつもりは、古事記にないのではないか。書紀においても戸惑いが見られるように、応神天皇の名前をめぐる変化については、記・紀当時から曖昧さが付きまといたと考えざるを得ない。

改めて見てみるに、太子は即位前、すなわち仲哀記の説話の中では、全て代名詞的な呼ばれ方をしている（前述）。名前が仲哀記で明示されないのは、名前の交換説話を念頭に置いているためではないか。古事記は応神天皇の名前を代名詞的に書くことで、名前がどうなつたかについての明言を避けていると考える。

判断としない態度を取りながらも古事記が当該説話を記しているのは、名前の交換の如何の他に、より書きたいことがあるためではないか。応神天皇が神と交渉し得る天皇であるという描写である。

大神は自分の名前を「名」、太子の名を「御名」として敬意を示しており、また名をかえた「幣」を太子に贈っている。古事記における「幣」の使用例は、以下の通りである。

- A、此種々物者、布刀玉命、布刀御幣登取持而、……（上卷）
- B、又於坂之御尾神及河瀬神、悉無遺忘以、奉幣吊也。

（宗神記）

C、今寔思求其国者、於天神地祇、亦山神及河海之諸

神、悉奉幣帛、……

(仲哀記)

D、(当該例)

E、爾、解其腰之玉、幣其國主之子。

(志神記)

F、故、獻能美之御幣物。

(雄略記)

まずAとCは、幣帛の意での使われ方である。またEのように、賤しい男が罪から免れるため、所持していた赤玉を天之日矛に「幣」したという使われ方が見られる。天之日矛は新羅国の王子であり、このやり取りは男から日矛への賄賂であるなども解され、目下の者から目上の者への差し出しものといえよう。また、Fの雄略天皇へ志變の大県主が贈った許しを得るための「能美之御幣物」も、Eに近い使われ方である。AとCは神々への捧げ物であり、いずれの例も下から上への敬意を払った贈り物とまとめられる。仲哀記で氣比大神が太子に「幣」した(D)というのも、大神が太子に敬意を払っていることを表していると考ええる。

一方で、太子の側も大神に、「恐、随命易奉」と丁寧に戻答し、入鹿魚を賜って「御食津大神」と称えたという。「神」ではなく「大神」と称するところに、敬意の高さがうかがわれる。太子も大神へ大きな敬意を払っているのである。

以上のように、氣比大神と太子とは互いに敬意を払う関係にある。氣比大神の段落で読み取るべきは、大神と太子の密接な交流である。ではその描写の意味するところは何か。古事記の記載順を遡って、香坂王・忍熊王の乱の説話を見ていきたい。

香坂王・忍熊王の反乱説話

於是、息長帶日売命、於倭還上之時、因疑人心、具喪船、御子載其喪船、先令言漏之、御子既崩。如此上幸之時、香坂王、忍熊王聞而、思將待取、進出於斗賀野、為宇氣比獵也。爾、香坂王、騰坐歷木而是、大怒猪出、軀其歷木、即昨食其香坂王。其弟忍熊王、不畏其態、與軍待向之時、赴喪船將攻空船。爾、自其喪船下軍相戰。此時、忍熊王、以難波吉師部之祖、伊佐比宿禰為將軍。太子御方者、以丸瀨臣之祖、難波根子建振熊命為將軍。故、追退到山代之時、還立、各不退相戰。爾、建振熊命、權而令云、息長帶日売命者既崩。故、無可更戰。即絶弓絃、欺陽帰服。於是、其將軍既信詐、弭弓藏兵。爾、自頂髮中、採出設茲、更張追擊。故、逃退逢坂、对立亦戰。爾、追迫敗於沙々那美、悉斬其軍。於是、其忍熊王与伊佐比宿禰、共被追迫、乘船、浮海歌曰、

伊奢阿芸 布流玖麻賀 伊多弓淑波受波 邇本杵理能
阿布美能宇美邇 迦豆岐勢那和

即入海共死也。

新羅征討の後、九州で太子が誕生して、倭に帰還しようとした息長帶日売命たちを香坂王・忍熊王は「待取」ろうとする。二王は「宇氣比獵」を行うが、その結果怒り猪が出現して香坂王は食殺されてしまった。忍熊王は「不畏其態」に戦闘を続行する。戦闘が始まり太子方の將軍である建振熊命が偽って、「息長

帶日売命はもう亡くなつたから戦う必要はない」と嘘の降伏をする。忍熊王方の將軍の伊佐比宿禰は騙されて武器を捨ててしまふ。結局、建振熊命が武器を再装備して忍熊王たちを追い詰め、王たちは自害して果てる。この説話が皇位繼承を主題とする点は疑いない。

まず見ておきたいのは、「宇氣比蕨」という行為である。ウケヒの解釈は種々あるが、神意を得るための行為ともいわれて⁽¹⁶⁾いる。論者は、ウケヒとは超常的な現象が起ることを要請する行為で、場合によつてはその結果に神意が示されると考えている⁽¹⁷⁾が、いづれにせよ今回の「宇氣比蕨」の場合、香坂王らの企みが成功するか否かを占うための狩りであるのは動かない。結果は香坂王が食い殺されるというものであり、明らかに戦闘を避けるべきことが示されているが、忍熊王はそれを無視し、結局敗北することになる。

最初にも見たように、麿坂王・忍熊王の乱は日本書紀にも記されている。神功撰政元年二月三月条に載録されている説話がこれに当たる。細部では諸々の相違があるが、麿坂王らが拳兵し、「祈狩」の結果麿坂王が死亡したために忍熊王が一人で戦闘を続行して、太子方の偽計にかかつて敗北するという粗筋は、古事記と共通している。

日本書紀の方の、説話冒頭から「祈狩」をめぐる部分までを確認しておきたい。

爰伐新羅之明年春二月、皇后領群卿及百寮、移于穴門

豊浦宮。即収天皇之喪、從海路以向京。

時麿坂王・忍熊王、聞天皇崩、亦皇后西征、并皇子新生、而密謀之曰、今皇后有子。群臣皆從焉。必共議之立幼主。吾等何以兄從弟乎。乃詳為天皇作陵、詣播磨興山陵於赤石。仍編船楫于淡路嶋、運其嶋石而造之。則每人令取兵、而待皇后。於是夫上君祖倉見別与吉師祖五十狹茅宿禰、共隸于麿坂王。因以為將軍令與東國兵。

時麿坂王・忍熊王、共出菟餓野、而祈狩之曰、(祈狩、此云于氣比餓利)若有成事、必獲良獸也。二王各居飯殿。赤猪忽出之登飯殿。昨麿坂王而殺焉。軍士悉慄也。忍熊王謂倉見別曰、是事大怪也。於此不可待敵。則引軍更返、屯於住吉。

時皇后聞忍熊王起師以待之、命武内宿禰、懷皇子、橫出南海、泊于紀伊水門。皇后之船、直指難波。于時皇后之船、廻於海中、以不能進。更還務古水門而下之。於是天照大神誨之曰、我之荒魂、不可近皇后。当居御心広田國。即以山背根子之女葉山媛令祭。亦稚日女尊誨之曰、吾欲居活田長峽國。因以海上五十狹茅令祭。亦事代主尊誨之曰、祠吾于御心長田國。則以葉山媛之弟長媛令祭。亦表筒男・中筒男・底筒男、三神誨之曰、吾和魂宜居大津津中倉之長峽。便因看往來船。於是隨神教以鎮坐焉。則平得度海。

相違している点のうち、今見ておきたいのは、まず「祈狩」(傍線部)の結果を受けた忍熊王の反応である。忍熊王は、麿坂王の死を受けて、「是事大怪也。於此不可待敵」といつて場所を

移動し、態勢を整えている。日本書紀でも忍熊王は敗北していることを考えれば、あるいはこの忍熊王の判断は誤りであり、やはり日本書紀でも忍熊王はウケヒの結果を読み違えているのかもされない。また、後に皇后が天照大神などの神々からの託宣を受けて祭祀を実行し（四段落目）、結果、戦に勝利していることからすると、忍熊王を上回る皇后の態度を描くことに主眼がある可能性もある。

いずれにせよ日本書紀の忍熊王は、「祈狩」の結果を見て何らかの対策を講じようとしている点、古事記の忍熊王とは態度が異なっている。日本書紀と比較した時、古事記の忍熊王はウケヒガリの結果に対して適切な対処をしようとしていないことは明確で、注目されてよい。古事記の忍熊王には神との交渉能力に大きな欠陥があることが示されていると考える。

古事記を見直してみたい。「反乱説話の描写を改めて見てみると、忍熊王たちの動きには注意すべき点があることに気づく。

於是、息長帯日売命、於倭還上之時、因疑人心、一具喪船、御子載其喪船、先令言漏之、御子既崩。如此上幸之時、香坂王、忍熊王聞而、思將待取、進出於斗賀野、為宇氣比獵也。
(仲哀記・再掲)

最初息長帯日売命は、倭に帰還する際に人の心が疑わしいといつて、太子は既に亡くなったとの噂を流した。そこで香坂王らは「將待取」と思つて宇氣比獵をする。太子が亡くなったとの話を聞いた香坂王らは、誰を「待取」ろうとしたのか。また併せて、「待取」とは何をしようとしたのか。

古事記において、「取」が「殺す」の意味でも使われていることは周知の通りである。

於是詔、茲山神者、徒手直取而、勝其山之時、白猪逢于山辺。
(景行記)

・乃、到其兄黒日子王之許、曰、人取天皇。為那何。

(安康記)

前者は、倭建命が伊弉岐能山の神を征伐することを指して「取」と言った例で、また後者は安康天皇が暗殺されたことを指して、大長谷王子が「取」といった例である。こうした「取」の例から、仲哀記の例は、香坂王らが息長帯日売命を殺そうとしたと解釈するのが一般的である。

しかし改めて考えてみると、香坂王らは既に太子崩御の情報を得ているのであり、その上でなぜ息長帯日売命を殺そうとするのだろうか。例えば息長帯日売命の生存が香坂王らの即位を阻む理由があれば別であるが、そうした描写も見られない。香坂王らが太子崩御の噂を信じていないのならば、太子と息長帯日売命との両方を殺そうとしたことになる。それならば話はわかるが、忍熊王は太子の死を疑っていない（後述）。「取」を「殺す」の意で捉える限り、香坂王らの行動には不明瞭な点が残ってしまうのである。

改めて古事記の「取」を見直すと、大体的場合には「手に取る」「手にする」の意味で使われている。今注意されるのは、古事記下巻の次の用例である。

故、天皇大怨、殺大日下王而、取持來其王之嫡妻、長田

大郎女、為_レ皇后。

(安康記)

安康天皇が大日下王を殺してその妻・長田大郎女を自分のものとしたという場面で、「取」と表されている。問題としている仲哀記の「取」は、この用例に近いのではないか。香坂王らは、太子の死を聞いた上で、息長帯日売命を手に入れようとしたのである。角川文庫の『古事記』では、「この噂を聞いて、待ち受けて皇后を手に入れようと思ひ」と現代語訳している。

続く場面を見直してみ。

爾建振熊命、權而令_レ云、息長帯日売命者既崩。故、無_レ可_レ更戰。即絕_二弓絃_一、欺陽燭服。於是其將軍既信_レ詐、弭_二弓威_一、
レ兵。

(仲哀記、再掲)

太子方の將軍である建振熊命が忍熊王方を騙して、息長帯日売命は既に亡くなったからもう戦う必要はないというと、敵は騙されて武器を捨ててしまったという。太子が生きていると忍熊王は考えていないからこそ、息長帯日売命の死の知らせを聞いて、戦うのをやめたのである。太子は生きていると考えているのなら、息長帯日売命の死の知らせを聞いても忍熊王が戦鬪をやめるはずはない。従って、忍熊王の目標は息長帯日売命にあることになる。そしてまた、息長帯日売命が生きていたら忍熊王の即位が阻まれる理由も特に見当たらない。忍熊王は、息長帯日売命を殺そうとしたのではなく、その手に収めようとしたのではないか。

今皇后有_レ子。群臣皆從焉。必共議之立_二幼主_一。吾等何_レ以_レ兄從_レ弟乎。

(神功紀、再掲)

日本書紀では香坂王らが「吾等何_レ以_レ兄從_レ弟乎」といって謀を

めぐらしたというが、太子や皇后が亡くなったとの偽計を、太子方が用いることはない。日本書紀の展開と比較した時、古事記の香坂王らの意図はいっそう明確になろう。古事記の香坂王らは、太子が亡くなったことを聞き、息長帯日売命を獲得するべく戦争を開始しているのである。では香坂王らはなぜ息長帯日売命に執着するのか。

その理由は、彼らの神との交渉能力の欠如によると考える。先に見たウケヒガリの結果を思い出したい。香坂王らは、神託を処理しきれずに崩御した仲哀天皇の能力を、そのまま受け継いだ皇子として位置づけられていると考える。香坂王らは自らの欠点を払拭するために、神との交信が可能な息長帯日売命を獲得しようとしたのである。

こうした状況に似たものを、同じ古事記の中巻、神武天皇条に見出すことができる。神武天皇の崩御後に、皇子当芸志美々は、神武天皇の太后である伊湊気余理比売との結婚を果たした。それは伊湊気余理比売が大物主神の女であるためだが、大物主神は倭の国魂たる神であり、同神の女を得て倭を支配することは、天下を治めるのに必要なのである。¹⁹⁾これと同様に、香坂王らが息長帯日売命を得ようとしたのは、神との交信能力が必要であったためと考える。

一方で、太子・品陀和氣命は息長帯日売命の血を引いており、仲哀天皇に欠けていた能力を既に克服しているということになる。仲哀天皇は神罰により崩御するような天皇であったが、息長帯日売命は神との交信が可能で、神の援助を受けて新羅征討も成

し遂げた人物である。太子・品陀和氣命は、そもそも天照大神らによつて即位が保証されていたが、同時に息長帯日売命の血によつて神との交渉能力も確かに身につけた存在であると位置づけられているのではないか。

こうした太子の能力を証明するのが、先に見た氣比大神の説話であると考ええる。太子と氣比大神とは、互いに敬意を示し合う仲にあることが示されていた。古事記が香坂王・忍熊王の乱に連続する形で氣比大神の説話を載せているのは、太子と氣比大神の説話を通して、太子が仲哀天皇の子でありながらも息長帯日売命のように神に通じ得る者であると示すためなのである。

氣比大神に続く酒宴の説話にも触れておきたい。

於是、還上坐時、其御祖息長帯日売命、釀待酒以獻。爾、

其御祖御歌曰、

許能美岐波 和賀美岐那良受 久志能加美 登許余邇伊麻
伊波多々 湏々久那美迦微能 加牟善岐 本岐玖琉本
斯登余本岐 本岐母登本斯 麻都理許斯美岐叙 阿佐受
袁勢 佐々

如此歌而、獻大御酒。爾、建内宿禰命、為御子。答歌曰、
許能美岐波 和賀美岐那良受 久志能加美 登許余邇伊麻
伊波多々 湏々久那美迦微能 加牟善岐 本岐玖琉本
斯登余本岐 本岐母登本斯 麻都理許斯美岐叙 阿佐受
袁勢 佐々

此者酒樂之歌也。

帰還した太子を息長帯日売命が酒を醸んで待ち受けて、歌を歌っている。「々(湏)久那美迦微」(少名御神)とは神代記・紀に

登場するスクナビコナのことを指す。一首目では「少名御神」の醸造した酒だと歌われるが、二首目では「この御酒を 醸みけむ人」と歌われており、その齟齬も問題とされている。息長帯日売命が巫女的な位置にあることを考えると、「少名御神」が息長帯日売命に寄り来て醸造させたとするのがよいのではないか。「待酒」を醸した息長帯日売命こそが、「この御酒を 醸みけむ人」である。

酒宴の説話は「少名御神」という神が品陀和氣命のために酒を捧げたことを表しており、氣比大神説話からの文脈で、同じく品陀和氣命と神との密な関係を告げているのである。仲哀天皇は神に通じ得ない天皇として崩御してしまつたが、応神天皇は父の負の特徴は完全に克服したとの主張である。懸案であつた神との交渉が可能な存在として、応神天皇のの讚美をも目指しているのである。

* * *

最後に簡単にまとめたい。仲哀天皇は神罰により没した天皇で、応神天皇はその次に即位した天皇であるといふのは、古事記・日本書紀が共に伝えている。仲哀天皇が欠点を有する天皇であるとの認識は、「共通認識」(注13参照)であつたと思われる。その上で、応神天皇をいかに描くかといつたことを考えた際に、古事記は仲哀天皇の弱点を逆手にとつて、応神天皇の讚美を目指したのではないか。応神天皇は神とも確かに交流し得る天皇であり、その即位には一点の曇りもないのだといふことを、香坂王・

忍熊王の乱、氣比大神、酒宴説話の流れの中で強調しているのである。

(1) 吉井巖「古事記」(『日本文学全史』上代)増訂版、學燈社、一九〇一年。

(2) 拙論「応神誕生——天照大神の神託——」(『古事記と歴史叙述』新典社、二〇一一年)。

(3) 新潮日本古典集成『古事記』(新潮社、一九七九年、一八一頁頭注)。

(4) 倉塚暉子「胎中天皇の神話」(『古代の女神話と権力の淵から』平凡社、一九八六年)。

(5) 応神天皇を指しての、「胎中答田天皇」(継体六年十二月)、「胎中之帝」(継体六年十二月・宣化元年五月)、「胎中天皇」(継体二十三年四月)といった表現が、日本書紀に見える。

(6) 例えば説話冒頭にあるように、「禊」をするために各地をめぐるというが、では「禊」は何のために行われようとしたのか。現行の注釈書では、直前の香坂王・忍熊王の反乱説話との関連が説かれている。策略のためであるにしても、太子は亡くなったとして喪舟に乗せたため(次田真幸『古事記(中)全訳注』講談社学術文庫、一九八〇年)などの解釈である。「禊」といえば、上巻の伊耶那岐神の例が想起されるため、仲哀記でも同様に死の穢れから理解するのはわかりやすい。ただ、仲哀記では結局のところ何の穢れであるのかは不明と言わざるを得ない。そもそも淡海・若狭国を経て高志前之角鹿で氣比大神と出会っているが、その後「禊」は行われたのかすらも言及がない。直前の反乱説話が死と関わるものであったために「禊」を行うという展開はわかりやすいが、結局のところ古事記ではそれ以上の意味は読み取れないのではないか。本文で後に述べるように、古事記には氣比大神の説話を通じて描きたい太子(応神天皇)像がある。氣比大神の説話に導くために「禊」を持ち出したものと考えておく。なお仲哀記の「禊」をめぐる解釈についての

研究史は、大脇由紀子「仲哀・応神記の構想——「禊」の物語的機能——」(『古事記説話形成の研究』おうふう、二〇〇四年)がまとめられている。

また、伊奢沙和氣大神が現れた「夢」は太子の夢だったのか、それとも建内宿禰の夢だったのかといった点も問題とされている。太子の夢とする説の場合、太子が大神と直接名易えの交渉をしたことになる。一方、建内宿禰の夢として捉える向きが強いのは、古事記における「夢」の用例を見るに、天皇の「夢」の場合には「御」が付されるのが通例であるためである。早く本居宣長が、太子ならば「御夢」とあるはずと指摘している通りである(『古事記傳』三十一之巻、「本居宣長全集」第十一巻、筑摩書房、一九六九年、四一八頁)。なお、天皇の夢に「御」を付す例(序を除く地の文)は、中巻の崇神・垂仁天皇の例に見られるが、一方で神武記の高倉下の夢には「御」が付されていない。ただし宣長は、「此は太子の御夢には非で御供人の夢なるべし、【そはまづは建内宿禰命のならむか他人のにもあるべし、】と、夢見る主体を建内宿禰に限定してはいない(同上頁)。建内宿禰は新羅征討の神託が下される場面で、仲哀天皇や息長帯日売命に従い、神との交渉を担当している人物である。ここでまた、氣比大神とのやり取りを建内宿禰が行うのは自然な流れである。神との交渉に長けている建内宿禰が、太子の代わりに氣比大神に応答していると捉えておく。

(7) 日本古典文学大系『古事記』(岩波書店、一九五八年)など。

(8) 本居宣長前掲注(6)書など。

(9) 日本思想大系『古事記』(岩波書店、一九八二年)など。

(10) 名前の交換ではなく「魚」と「名」の交換と見る阪下主八の説(「魚と名を易えた話——『古事記』の説話表現——『古事記の語り口起源・命名・神話』笠間書院、二〇〇二年)もあるが、通説通り「名」のやり取りと考える。

(11) 植田麦「本牟智和氣御子と品陀和氣命」(『古代日本神話の物語論的研究』和泉書院、二〇一三年)。

(12) 「然則」以下を「私記攪入」と疑う説もある(河村秀根・益根「書紀集解」二、臨川書店、一九六九年、六一―六頁)。

(13) 西宮一民は、太子(オホトモワケ)と大神(イザサワケ)の名が交換されたと解し、太子が新たに「イザ」(さざ、サ(神籬))をどうぞの名」をもたらしたのであり、「納」と同音の「誉田」(美田の意)という新名義への転換の契機を与えた」と述べている(「神功皇后 応神天皇の物語」『國文學 解釈と教材の研究』三六一―八、一九九一年七月、七四頁、括弧内原文)。名義に踏み込んだの解釈であり、納得させられるものがあるが、なお古事記で太子の名が不明瞭なままに描かれるのはなぜかという疑問が残る。曖昧なままに書いていることにはやはり意味があるだろう。

それではなぜ、古事記で両者の名をめぐるやり取りが描かれているのか。日本書紀においても名についての伝承があった(前述)。ということは、記・紀成立の時代、ホムダワケとケヒの神とが名のやり取りをしたという伝承があったと考えられる。記・紀成立の頃に当然と認識され、伝えられていた事柄や人物の印象は多くあったと想像される。そうした認識を「共通認識」として捉え、「共通認識」との関わりの中で伝承は作られていたことを前に述べた(前掲注②)を参看。太子とケヒの神との名のやり取りも、共通認識であったと考ええる。古事記は名のやり取りというモチーフを積極的に選んではいない。あくまで共通認識に基づいての展開なのである。

名のやり取りというモチーフについては、記・紀以前の段階で考える必要がある。神との名のやり取りは、大きくいえば神との交渉を意味すると思われる。ただし、古くは名前が実体と密接に関わると考えられていたとはいわれている通りであり、この場合でいえば太子とケヒの神との存在に関わるやり取りであったと考えられる。例えば雄略天皇と一言主神との邂逅(古事記下巻)や、海幸・山幸のサチがえ(神代記)とは、やはり意味は異なっている。同様に、小碓命が熊曾建から名を献上され、倭建命と呼ばれるようになったこと(景行記)も、名前が置き換えられたわけではないので、当該

例と同様に扱えない。

ホムダワケとケヒの神とは、共に朝鮮半島と緑の深い存在である。本文でも述べたように、ホムダワケには「胎中天皇」との認識があり、ケヒの地は交通の要衝であった。そうした海外の接点ともいえる性格が、両者の名のやり取りという伝承を生み出したのではないか。一案として示しておきたい。

(14) 古事記における「弊」と「幣」の用法には問題が存する(神道大系「古事記」神道大系編纂会、一九七七年、三二頁注三参看)。今は音假名の例を挙げず、また仮に全て「幣」字で掲げることとする。

(15) 矢嶋泉「古事記」中・下巻の反乱物語(稲岡耕二先生還暦記念『日本上代文学論集』塙書房、一九九〇年)。

(16) 例えは日本古典文学全集「古事記」(小学館、一九七三年)は、上巻の天照大神と須佐之男命の宇気比神話の場面に注して、「ウケヒはあらかじめ神に事の結果を誓っておいて、そのとおりの験が現われるか否かで神意を知る卜占の一種」と述べている(七六頁頭注一)。

(17) 拙論「天皇の短命起源神話」(前掲注②)書。

(18) 中村啓信訳注「新版 古事記」(角川ソフィア文庫、二〇〇九年、三七二頁)。

(19) 松本直樹「トヨタマビメとスセリビメ——異界王の女——」『古事記神話論』新興社、二〇〇三年。

(20) 西郷信綱は、「酒の神少名御神が寄り来り、神がかり状態になつて人びとを舞い狂わせ甕のまわりをぐるぐる廻らせて醸した酒と解すべきではなからうか。そう解して始めて、「この御酒は、我が御酒ならず」という句が真に生きてくる」といっている(「古事記注釈」第六巻、ちくま学芸文庫、二〇〇六年、二五〇頁、傍点原文)。少名御神が「人びとを舞い狂わせたとする点を除いて賛成できる。

※本文の引用は下記の書による。ただし、いずれも一部句読点や字体などを私に改めた。また音注は省略し、その他の分注は「()」に入れた。

古事記——神道大系『古事記』（神道大系編纂会、一九七七年）。

日本書紀——井上光貞監訳『日本書紀』上（中央公論社、一九八七年、

原文校訂は林勉）。

※本論は、「仲哀記の応神天皇」と題した口頭発表（早稲田大学国文学会

二〇一二年度秋季大会、二〇一二年二月、於早稲田大学文学学術院）を基としています。席上御意見を賜った方々に、御礼申し上げます。

新刊紹介

菊池威雄著

『鎌倉六代将軍宗尊親王』

——歌人将軍の栄光と挫折——

宗尊親王は、皇族として初の将軍であるうえ和歌にも巧みで、その歴史的かつ和歌史的に果たした役割は非常に大きい。しかし、現況ではその評価が正しく認められていないとはいえない。

本書は宗尊親王について、歴史のかつ和歌史的に概観している。まず歴史的な観点から、将軍と北条氏との関係と、皇族将軍が求められ、成立するに至った事情を述べる。そうして将軍となった宗尊親王が幕府で将軍としてどのような役割を担ったかということと共に、その和歌的な活動と歌壇的な立場を考察していく。

しかし、宗尊親王は、結果として将軍を

退下させられることとなった。本書はこれを、和歌の呪術的権威による将軍権威の高揚と北条氏の権力との軋轢との観点から分析する。

さらに、宗尊親王の和歌を、万葉学びや実朝意識、またその和歌の述懐性や叙述性から述べる。

これまで包括的な研究の少ない宗尊親王に関して、その活動や和歌について知る際に非常に有益な一冊である。

（二〇一三年五月 新典社 四六判 二二三頁 税込一六八〇円）
〔須藤智美〕

佐藤泰正編

『女流文学の潮流』

本書は女性による表現をテーマに、古典と近現代、詩と散文といった境界をこえて

多彩な論文を収めた一冊である。

しかし各論文が孤立しているわけではない。たとえば、「女性ならではの紋切型表現に対する川上未映子氏の問題提起は、女性の詩が戦後、体制やジェンダーへの批評性をもつようになり、八〇年代の消費社会に至ってさらに変化していったさまを丹念に追った渡辺玄英氏の論と接続することが可能だ。

『紫式部日記』から紫式部の批判精神や苦悩の在り方を読み取る安道百合子氏の論と、山田有策氏の論ずる樋口一葉とは、「書く女」の自意識という問題を共有している。「女性による表現」に関する、さまざまな角度からの問題提起を促す好著であり、通読することで多くの刺激を得ることができるとは言えない。

（二〇一三年三月 笠間書院 四六判 一七九頁 税込一〇五〇円）〔大嶋さやか〕